



呉清源 極みの棋譜 (The Go Master)

2007(平成19)年9月25日鑑賞(東映試写室)

監督=田 壮 壮テイエン・チュアンチュアン / 出演=張 震チン・シェン / 柄本明シロビシヤ / 張文嘉チン・カ / 伊藤歩 / 仁科貴 / 大森南朋 / 井上堯之 / 南果歩 / 宇都宮雅代 / シン・バイチン / ベティ・ホアン / 米倉斉加年 / 野村宏伸 / 松坂慶子 (エスピーオー配給 / 2006年中国映画 / 107分)

……中国第5世代監督の田 壮 壮テイエン・チュアンチュアンが、美しい映像でしっかりと描いた天才棋士呉清源の生涯は魅力いっぱい。しかし不安点は、「昭和の棋聖」の名前や実績を知らない日本人が多いこと……。だって、「中国大好き」そして囲碁も将棋も大好きな私でも、「原爆下の対局」、「帰化」、「壘宇教」、「交通事故」などは全然知らなかったのだから……。1972年9月29日の田中角栄と周恩来の握手に象徴される日中国交正常化から35周年を迎えた今、この映画を鑑賞し、あれこれと思いをめぐらせる中、より一層の日中友好に寄与したいものだが……。

まず田 壮 壮監督に注目！

この映画最大の注目点は、中国第5世代監督として張 藝 謀チャン・イーモウ、陳 凱 歌チェン・カイコー監督と並ぶ田 壮 壮監督テイエン・チュアンチュアンが、『春の惑い』(02年)に続いて4年ぶりに監督したものだということ。次に、その素材が中国でも日本でも有名な囲碁界の重鎮呉清源であり、しかも日本での撮影だということ。資料収集については完璧主義者(?)の田 壮 壮監督テイエン・チュアンチュアンのこと、呉清源の著書だという『中の精神』『以文会友』の読み取りや、93歳の高齢ながら、今なお小田原の自宅で囲碁の研究に余念のないという呉清源からの直接の聴き取りなど、さまざまな資料を徹底的に集めたことは当然。また、徹底的に撮影にこだわる田 壮 壮監督テイエン・チュアンチュアンのこと、そのメインのロケ地として選ばれたのが近江八幡市であることは2005年2月7日の朝日新聞の夕刊の記事で知っていたが、さて

どんな美しい映像がスクリーン上に登場してくることやら……。そんなこんなの期待を込めて、まずは、田 ^{テイエン・チュアンチュアン} 壮 ^{スー・チー} 壮監督に注目！

張 ^{チャン・チェン} 震にも注目！

私の場合、女優の名前と顔を覚える意欲と能力が10とすれば、男優の顔と名前を覚えるそれは3か4……。その私が2007年3月14日に台湾の侯 ^{ホウ・シャオシエン} 孝賢監督の『百年恋歌』(05年)を観た時、女優の舒 ^{スー・チー} 淇と共にはっきり印象に残った若手俳優が台湾の張 ^{チャン・チェン} 震。そして、彼の次回作がこの『呉清源 極みの棋譜』であることを知り、その時から注目していたもの。また実は、それまでも顔と名前が一致していなかっただけで、私は彼を『ブエノスアイレス』(97年)、『2046』(04年)、『愛の神、エロス』(04年)、『グリーン・デスティニー』(00年)などで何回も観ていたもの(『シネマルーム13』93頁参照)。

そんな張 ^{チャン・チェン} 震は、プレスシートによると「いまや映画祭常連のアジア監督たちがこぞって起用するアジア屈指の俳優として、その才能を存分に発揮させている」と最大限の賛辞を受けている。彼の最新作が、韓国の鬼才キム・ギドク監督によるラブストーリー『プレス』(07年)やジョン・ウー監督の超大作『赤壁 (Battle of Red Cliff)』だということを知れば、その評価も当然。そんな張 ^{チャン・チェン} 震が、『百年恋歌』に続いてしっかりとした渋い演技を披露しているが、映画として、また役柄として地味なだけに、さて日本での大ヒットは……？

知らなかったなあ その1——大変な時代に、大変な天才が

プロの将棋の世界は日本人棋士ばかりだが、プロの囲碁の世界は呉清源に続く世代の実力者である台湾の林海峰やさらにそれに続く世代の実力者である韓国の趙治勲をはじめ、日本人以外の高段棋士がたくさんいる。ちなみに、2600年前に中国で発祥し、4世紀頃日本に伝わったといわれている囲碁の人口は、中国が圧倒的に多く第1位(2500万人)、続いて第2位が韓国(900万人)、第3位が日本(500万人)、第4位が台湾(150万人)となっているとのこと。ちなみに日本では、戦国時代の武将たちが好んで碁を打っている姿が登場するが、これは軍事上の戦略、戦術を練る訓練に囲碁の戦いが適しているため……？

この映画は「昭和の棋聖」と呼ばれた呉清源の生涯を描くものだが、驚いたことに、



© 2006, Century Hero, Yeoman Bulky Co

私の事務所で呉清源を知っているかと聞くと、10人のスタッフたちは誰も知らなかった。私は将棋や囲碁が大好きだし、団塊世代だから当然知っているが、今の日本人は彼の名前すら知らない人が多いようだ。

1914年に福建省で生まれ、7歳から囲碁を学び始めた呉清源は、たちまち「天才少年」と呼ばれるようになったらしいが、そんな彼を日中の政治、軍事関係が悪化していく中、日本に呼ぼうとした日本囲碁界の重鎮である瀬越憲作（柄本明）の決断は思い切ったもの。そしてまた、母と兄と共に1928年に14歳で日本にやってきた呉清源の決断も相当なもの。1928年といえば、張作霖が爆破された年。そんな大変な時代に、大変な天才が生まれ日本にやってきていたことを、この映画であらためて確認。彼がこんな激動の時代に生まれ、日本にやってきたことを私は知らなかったが、この映画を観ていると、私が知らなかったなあと思うことが次々と……。

知らなかったなあ その2——何とあの日、広島で本因坊戦が

本因坊家は江戸時代にあった4つの碁の家元の1つで、長くその地位は世襲とされ

てきた。しかし、明治時代に入ると日本棋院の設立（1924年）を経て本因坊の世襲制が廃止され、1939年にはその名を冠とした実力本因坊戦が開始された。

このような流れについて私はある程度の知識をもっていたが、この映画を観てはじめて知ったのは、1945年8月6日というあの日、何と広島で橋本宇太郎 vs. 岩本薫の第3期本因坊戦の第2局が行われていたということ。そんなこと、ちっとも知らなかったナア……。

爆風によって碁石が飛び散る中、「原爆下の対局」は最後まで続けられたというから驚き。中国人である田 テイエン・チュエン・チュエン 壮 壮監督がこのシーンをどんな気持で撮影したのか、その心情は知るすべもないが、立会人である瀬越を演ずる柄本明の静かな名演技がキラリと光るそのシーンの重厚さにはただビックリ。

知らなかったなあ その3——「帰化」による日本国籍の取得は……？

私は弁護士として、中国人が日本に帰化する手続を代理したことがあるが、帰化については本人の信用や資力などいろいろと難しい要件がある。もちろん戦前の法規の内容は知らないが、多分似たようなもの……？ したがって、14歳（1928年）で日本に渡り、盟友であり生涯のライバルとなった木谷実（仁科貴）と共に「新布石」を提唱して一大ブームを起こすと共に、トーナメントで勝ち進み、19歳（1933年）で本因坊秀哉名人への挑戦権を獲得したという呉清源が帰化の要件を充たしていたことは当然……。

しかし当時は、日本の中国東北部への進出を契機とする日中対立が次第に深刻になっていたから、囲碁界における「日中対決」を素直に喜ぶような状況でなくなっていたことも事実。結果的に呉清源は、1936年4月に帰化して日本国籍を取得したとのことだが、これも私は全く知らなかったこと。

スクリーン上では、精神的な支えであった庇護者の西園寺公毅（米倉斉加年）が1935年に他界したショックですべての試合を放棄して中国へ赴き、紅卍会に入信する呉清源の姿や瀬越からの「日中戦争が始まっても日本に残れ」とのアドバイスに苦悩する呉清源の姿が登場する。そんな呉清源の苦悩ぶりを張 チャン・チュエン 震が絶妙に演じているが、日本国籍の取得は呉清源にとって最大の決断だったはず。そんな決断を余儀なくされた当時の彼の心境は、いかなるものだっただろうか……？

■知らなかったなあ その4——^{じゅう}璽宇教とは？

高橋和巳の大作『邪宗門』は、1892（明治25）年、霊能者出口なおに国祖・国常立大神の神示が降り、同じく霊能者である出口王仁三郎が出口なおの娘婿となったことによって生まれた大本教団の栄枯盛衰を描いた大河小説で、私は時間を忘れて読みふけた記憶が残っている。大本教の教義は、お筆先など神がかりによるものだが、教義の一部にあった「立て替え・立て直し」は一種の革命思想に通じるもの。またマスメディアを通じた布教は既成マスコミ（新聞）の脅威となったため、大本教は不敬罪と新聞紙法違反の罪によって1921年以降2～3回の官憲による大弾圧を受けることになった。『邪宗門』は、そんな中、主人公千葉潔が大本教の教義を守り、活動を続けていく姿を描いた一大叙事詩……？

他方、呉清源が妻中原和子（伊藤歩）と共に信奉し、あの名横綱双葉山も入信したというのが、長岡良子（南果歩）を教祖とした新興宗教の^{じゅう}璽宇教だが、これについても私は全く何も知らなかったもの。

歴史上には靈感の並外れて強い女性が時々登場するが、それは一般的に女の方が男より靈感が強いため。そしてそれは、洋の東西を問わない常識。したがってヨーロッパでは神のお告げを受けたというジャンヌ・ダルクが登場したが、その手の靈感の強い女性は、日本でもゴロゴロと登場していたようだ。大本教の教祖出口なおもそうだが、^{じゅう}璽宇教の教祖長岡良子もそんな特殊な靈感を備えた女性だったようで、昭和天皇が1946年1月に人間宣言を行ったことによって、彼女は「天皇の神性が自分に乗り移った」と宣言し、自らを「^{あまつしるすてるたえひかりながひめのすめらみこと}天璽照妙光良姫皇尊」（略称：^{じこうそん}璽光尊）と名乗った。ちなみに、プレスシートには「^{じゅう}璽宇教」と書いてあるが、ネット情報によれば「^{じゅう}璽宇教という表現は正しくない」と断言されているから、いろいろと難しいもの。

^{ティエン・チュアンチュアン}田 壮 壮監督は教祖の住まいである「^{じゅう}璽宇皇居」を警察が急襲し、食糧管理法違反の罪で信者の双葉山らを逮捕するシーンを描いているが、これは1947年1月21日に起こった歴史上の事実。教祖長岡良子については大本教のような大裁判事件になったわけではなく、双葉山もそして呉清源やその妻和子も後日^{じゅう}璽宇教を完全に脱退することになるのだが、これは決して「転向」したためではなく、逆に^{じゅう}璽宇教が墮落したと自主的に判断したため。そこらあたりの^{じゅう}璽宇教の実情については、教祖と対立する立場となった金木先生（宇都宮雅代）の呉清源に対する言葉を参照しながら、じ

っくりと勉強したいもの……？

知らなかったなあ その5——やはり交通事故の後遺症は怖い

私は1974年の弁護士登録以降、33年間一貫して交通事故の事件を処理しているが、交通事故が加害者と被害者そしてその家族に与える影響はホントに千差万別。呉清源が47歳の時（1961年）に遭遇した交通事故は、タクシーから降りて歩き始めた彼が出会い頭にバイクにはねられたものとのことだが、これも私は全く知らなかったもの。

それによって頭を打ったせいか、意外にその後遺症は重かったようで、その後彼はひどい頭痛や精神錯乱を起こすようになり、囲碁に集中できなくなったらしい。現にこの交通事故を境として、呉清源の成績は精彩を欠くようになったとのこと。やはり交通事故の後遺症は怖いと痛感。

星、三々、天元、そして打ち込み十番碁

囲碁のルールやプロ棋士の実態を知らない人には、この映画が映し出す布石の意味や碁盤を前にした勝負師たちが放つ熱気を容易に理解できないはず。ところが、ティエン・チュアンチュアン田 壮 壮監督は特にそれについて観客向けのフォローはせず、あくまで自分が納得する映像をつくり続けている……？

映画の前半、「日中対決」のシーンで登場する星、三々、天元と続く、呉清源とその盟友木谷実が編み出した布石は、その後「新布石」として大流行したものだが、やはりそれくらいの知識はもっておかなければ……。また、激動の昭和の時代、並みいる強豪棋士たちを次々と打ち負かした呉清源を印象づけるについては、「打ち込み十番碁」というルールが大きく影響しているはず。この打ち込み十番碁における棋士たちの勝負の姿を見るだけでも、この映画の価値が……。

もう1つ、天元とは碁盤の中央の1点だが、木谷三羽鳥と称された内の一人武宮正樹が愛用したのが天元で、彼の流儀は宇宙流と称されたもの。映画のラストには、70歳となった呉清源が行った1984年の引退披露式のシーンが登場するが、その1番手は橋本宇太郎。そしてその対局における彼の初手は何と呉清源の得意とする天元。この時、会場からはどっと感嘆の声があがった、とのことだ。

字幕が多いのはちょっと……？

ある人物の自叙伝を元に、その人物像を映画で描こうとする時、どうしてもそのストーリーを追いたくなくなってしまうのが人の常……？ たとえば、北条秀司の名作『王将』を映画化するについては、阪田三吉がみせる数々の奇行と小春との純愛(?)、そして関根名人との宿命の対決という大きなストーリーの中で阪田三吉の人物像をどう描くのが勝負のポイント。呉清源の波瀾に満ちた生きざまは阪田三吉のそれに勝るとも劣らないものだから、そのさまざまなエピソードを印象強く描写し、ストーリー性をガッチリ固めるという描き方も当然考えられ、私が監督ならそんな描き方をしている(しかできない)だろう。しかしプレスシートの中で、「撮影したかなりのシーンがカットされているようですが、本作ではストーリー性よりも、その時代の雰囲気や言葉では表現できない情感を重視した感じがします。その意図があれば教えてください」との質問に対して、

昭和の棋壇は、清源を断つ人もいない人々が多かった。しかし、「ヒカルの碁」が大ヒットし、囲碁の面白さが分かる者が増えた。そして一九七一年九月、十九日の甲山角栄と簡肇求の握手によって甲山国策正常化二十五周年を迎えた。今世紀の映画を、昭和三年、十四歳で米口した天才少年は十九歳の時、關根名人と共に「新将軍」を撮り出し、本因坊戦に進出。また戦前・戦後を通じて



呉清源 極みの棋譜



©2006, Century Hero, Yeoman Bulky Co

この映画から日中友好を！

「打ち込み十番書」の帰化を決断したが、迫した対局シーンは必ずしも最強の名をほしいままに名譽を現るに表現は出来た。まじした。そして九十歳を過ぎた大きなお辞儀の哲理を機軸中。張藝謀、陳凱歌と並ぶ第五世代監督の旗手田壯壯が注目したのは、日中戦争を軸とした激動の時代に生きた呉清源の人間としての苦悩の姿。焦点の一行われていたという昭和十年彼は日本へに戻りた(田壯壯の重宝)。類題悪作(柄本明)ながら日中友好のありを立憲人とするこの方方を考えたものだ。

て「打ち込み十番書」の帰化を決断したが、迫した対局シーンは必ずしも最強の名をほしいままに名譽を現るに表現は出来た。まじした。そして九十歳を過ぎた大きなお辞儀の哲理を機軸中。張藝謀、陳凱歌と並ぶ第五世代監督の旗手田壯壯が注目したのは、日中戦争を軸とした激動の時代に生きた呉清源の人間としての苦悩の姿。焦点の一行われていたという昭和十年彼は日本へに戻りた(田壯壯の重宝)。類題悪作(柄本明)ながら日中友好のありを立憲人とするこの方方を考えたものだ。

大阪日日新聞 2007 (平成19) 年11月9日

ティエン・チュアンチュアン

田 壯 壯監督は明確に、「呉清源さんの半生を一本の映画ですべて描くのは不可能です。そこで事実そのものを並べるより、呉清源さんの視点で見たことや感じたこと、体験したことを描いていく、奥行きのある描き方にしました。したがって、この映画は伝記というよりも、彼が精神的に何を求めているのか? というテーマを描いています」と答えている。これは田 壯 壯監督ならではのつくり方だし、それによってこの映画の格の高さが示されているのだが、逆に物語としては少しわかりにくくなっている感も……。そこで多用されるのが、いつ何が起こったということを紹介する字幕だが、これはナレーションと同じで、その多用はちょっと……?

日中国交正常化35周年を契機として……

安倍内閣が1年間で終わり、福田新内閣が誕生した中、2007年9月29日には日中国交正常化35周年を迎えた。1972年9月29日の田中角栄と周恩来の握手に象徴される日中国交正常化は、戦後日本の歴史の中で、①1951年のサンフランシスコ講和条約の締結と日米安全保障条約の締結、②1960年の日米安全保障条約の改定と並ぶエポックメイキングな出来事。

毛沢東が率いた新生中国は1966年から76年の文化大革命によって大きな打撃を受けたが、それでも新指導者鄧小平のもと改革開放政策を推し進めることに成功した。その後、江沢民（1989年以降）、胡錦濤（2003年以降）と続く指導者の下で、共産党一党支配下における市場経済という独自の国家をつくりあげた中国は、いよいよ2008年8月には北京オリンピックが開催されるという「開かれた国」になった。

中国は歴史のある国、そして懐の深い国。したがって島国ニッポン人がまともに対応するとなかなか勝てないかもしれないが、日中国交正常化35周年を迎えた今、「昭和の棋聖」呉清源の生涯をじっくりと味わいかつ勉強しながら、新たな日中友好、日中交流のあるべき姿を考えてみる必要があるのでは……?

2007(平成19)年9月29日記